

「自己の空位」に触れ合う労働実験

——黒井千次「聖産業週間」論

李 承俊

1 問題提起

「穴と空」(『屠』1968・9)で1968年下期、「時間」(『文芸』1969・2)で1969年上期、「星のない部屋」(『文学界』1969・10)で1969年下期、「赤い樹木」(『文学界』1970・4)で1970年上期、「闇の船」(『文学界』1970・9)で1970年下期など、芥川賞候補に上がった受賞には至らなかった黒井千次の「聖産業週間」(『文芸』1968・3)は、黒井千次を代表する作品としてよく取り上げられている。

この作品に対する先行研究は、物語の主軸をなす田口運平の労働実験に対する評価をめぐって展開された。竹中智子は「現代の企業内で、その純粋率直な労働のイメージが満たされるであろうか¹」と言っているが、これには「管理社会の内部における「聖産業週間」の構築」が実験された小説として評しつつ、労働実験の失敗は最初から予想されていたとする饗庭孝男の指摘と共通点が見られる²。「単純豪快な労働のイメージ」を日常的な企業内の仕事においてつかむために敢行された一週間の労働実験を、そもそも達成不可能なものであったとする論調は、「聖産業週間」の先行研究全体を貫通する大前提となっていると言ってよい。

先行研究の分岐点は、失敗する労働実験の描写から何を読み取り、また失敗する実験をあえて描写する作者の意図をいかに評価するかという地点にある。ここでは、東京大学経済学部に進学して横山正彦ゼミでマルクス主義経済学を本格的に勉強するようになり、活動初期において『新日本文学』などを中心に労働現場を作中舞台と設定する作品を多数発表した黒井千次の作家履歴と関連させる形で、マルクス主義の理論や思想を軸とする読解が試みられている。鎌田慧は、「マルクス流」に言えば「労働過程はそのまま資本の支配過程である」のに、失敗する労働実験において「支配と被支配の関係を見失って」いく田口という人物を創造した作者は、「現在の労働がいかに無惨なものになっているか」をあらためて見定めるべきだとし、失敗する労働実験の描写及び作者の意図を批判している³。一方、萩久保泰幸は、失敗する労働実験を形象化することで「現代における労働の不毛・空しさ」を「現実的に」描き出すことに成功しており、失敗した労働実験の結末から「人間の自己疎外としての私的所有の積極的止揚としての共産主義(マルクス『経済学・哲学草稿』)への道が垣間見られると述べている。鎌田と同様にマルクス主義経済学を軸としつつも、失敗する労働実験の描写及び作者の意図を、萩久保は評価している⁴。両者の先行論に対してマルクス主義の理論や思想から再検討を行い、その是非を問う作業は筆者の力量を超えるが、ただし、同一の理論・思想を下敷きにした読解なのに相反する分析結果が導出されるということは、

1 竹中智子「黒井千次小説」、『新潮』1976・1、40頁。

2 饗庭孝男「反歴史主義の文学」、『文芸』1970・7、222頁。

3 鎌田慧「りんごと工場」、『新日本文学』1974・11、34-39頁。

4 萩久保泰幸「聖産業週間」、『解釈と鑑賞』1973・5、91-92頁。

5
紅野謙介「作家案内」、『時間』、講談社、1990、364頁。

6
前田愛は、黒井千次や古井由吉を例にしなが
ら、「悔恨共同体」の崩壊を呈した「内向
の世代」文学の時代性を論じている(ただし、
未完)。前田愛「一九七〇年の文学状況」(初
出1986・3)、『増補 文学テキスト入門』筑
摩書房、1993、213-232頁参照。

7
1958年から1964年にかけて毎年小説作品
を発表していた黒井であるが、1968年「聖
産業週間」を上梓するまで、約4年程度小説
を発表しなかった事実を記しておく(た
だし、戯曲は存在する)。黒井千次の履歴に
関しては、『昭和文学全集 第24巻』、小学館、
1988、1167-1170頁、紅野謙介「作家案内」、
前掲『時間』、360-371頁参照。

8
「悔恨共同体」に関しては、丸山眞男「近代
日本の知識人」(初出1977・10)、『丸山眞男
集 第十巻』岩波書店、1996、223-268頁
参照。

9
1970年前後の文学における「内向の世代」の
重要性を指摘したものに、石川巧『高度経済
成長期の文学』、ひつじ書房、2012、8-10頁
参照。

「聖産業週間」という小説テキストの読解に、マルクス主義に代表される理論や思想が絶対的に有効ではないということの傍証になると判断される。

確かに黒井千次は、「青い工場」(『新日本文学』1958・2)や「メカニズムNo.1」(『文学界』1958・6)などの作品で、「マルクス流」に言えば「労働過程はそのまま資本の支配過程である」(鎌田慧)労働の実態を、シュールレアリスム的な手法を通じて形象化した。紅野謙介の言葉を借りれば「安部公房を方法的に意識しながら、抽象的設定、寓意的話法において工場や企業に展開される人間のモノ化を暴き出すところに主眼が据えられていた」⁵。だとしたら、鎌田や萩久保による上記の「聖産業週間」に対する評は、いずれも「聖産業週間」以前に見られる作者の素質や性格との連続あるいは不連続を問題視しているのが分かる。けれども、1970年前後の文学状況を俯瞰しながら、黒井千次を筆頭とする「内向の世代」の文学的特質として「「悔恨共同体」特有の〈時間〉意識」の「無化」「相対化」を分析する前田愛の論⁶を踏まえれば、1968年発表の「聖産業週間」を、主眼点や指向性においてそれ以前、具体的に言えば1958年から1964年の間⁷に執筆された作品とは、別の次元で考察せねばならないと思われる。

周知のように、「悔恨共同体」と命名される戦後知識人の深層には、戦前のマルクス主義につながりうる心情が働いていた⁸。その「自責あるいは悔恨感情」に、「共産党への過剰なまでの同伴者の心理」が作用していたのであれば、そのような「過剰」な心理は、戦前のマルクス主義に代表される知識・教養に培われて形成された知識人共同体に対して、郷愁と呵責の念を同時に呼び覚ますものになりかねないだろう。だとしたら、「内向の世代」が「悔恨共同体」特有の〈時間〉意識を「無化」「相対化」しうる時代性を背負っていたとする前田の指摘は、先述したような「聖産業週間」の分析においてマルクス主義に代表される理論や思想が絶対的に有効ではないとする本論の趣旨を、「内向の世代」の範疇まで拡大したものになろう。本稿は、黒井千次を「内向の世代」とする先行研究を受け継ぐものである。1970年前後の文学を論じる際に、必ず言及されるのが「内向の世代」である⁹。1970年前後の「内向の世代」の範疇や特質に関する議論は、その命名者である小田切秀雄から上記の前田愛に至るまで、様々な論者によってなされてきた。重要なのは、本論で詳述するが、「内向の世代」を代表する作家として黒井千次が必ず取り上げられている事実である。

要するに、マルクス主義と通じる「悔恨共同体」的な思考や心情を「相対化」しつつそれとは異なるものを表出した文学として、黒井千次を含めた「内向の世代」が1970年に前後して浮上したのであれば、「内向の世代」としての黒井千次の特徴を明らかにした上で「聖産業週間」を読み直す作業は、1970年前後における文学的動向を踏まえる形で本小説を新たな角度から考察する道を拓くとともに、既存の先行研究の克服にもなるだろう。

以上のような問題意識から本稿は、黒井千次「聖産業週間」を1970年前後の文学動向と連動させながら読み直す試みである。そのために、「内向の世代」という規定を積極的に活用する。まず、「内向の世代」という規定を再浮上させ、「内向の

「世代」規定をめぐる議論において黒井千次が「内向の世代」代表作家として目されることに注目する。そこから「内向の世代」という規定を再証明することで、「内向」と「世代」という二つの項が「内向の世代」規定に働いていることを確認する。その上で、本稿では特に「内向の世代」黒井千次における「内向」を俎上にのせ、「聖産業週間」において「単純豪快な労働のイメージ」をつかむための労働実験の描写が黒井における「内向」の内実と通じる様相を分析し、「自己の空位」の発見に導かれる「内向」が、いかなるプロセスを経て展開されるのかを考察する。最後に、抽象的なイメージの連鎖によって「自己の空位」を発見する過程に、抽象性を脱皮した実在的な身体感覚が働いている様相を考察し、「内向」に具体的かつ実在的な身体的接触による触れ合いが作用していることを明らかにする。

2 「内向の世代」における「内向」と「世代」、黒井千次

本節では、「内向の世代」規定をめぐる議論を再検討し、黒井千次がいかなる位置を占めているのかを確認する。すでに指摘したように、1970年前後の文学を論じる上で、「内向の世代」は欠かせないものである。1970年前後の「内向の世代」に関する議論は、「内向の世代」の範疇を枠付けした上で、規定された枠の正当性を裏付けるように個別の作家や作品を取り上げる、といった特徴を有している¹⁰。

「内向の世代」をめぐる議論においては、「内向の世代」における「内向」が活発に議論された。「内向の世代」命名者の小田切秀雄による「脱イデオロギー」文学への糺弾という論調¹¹は、「私」に対しての責任解除¹²、連帯を求めない「私」をめぐる永久運動¹³、と継承される。この流れの論者は、「内向」する「脱イデオロギー」文学における、作中世界の主体「私」の不安定さと抽象性を指摘し、そのような「私」を作り上げた作者を批判する。「内向の世代」におけるあやふやな「私」の出現、主体性を喪失して現代社会をさまよう「私」の創出が、「私」の外部との連帯・連携の契機を手放した「内向」として抽出されたと言えよう。このような議論において「内向の世代」の「一番手と目される」¹⁴のが黒井千次であった。

「内向」の項が重視される一方、「内向の世代」における「世代」の項も平行して議論された。けれども、この点に着目した論及は数も少なく、その比重は「内向」に比べて軽かったと思われる。注¹¹で示したように、小田切による「内向の世代」命名には、当時の文壇に対する焦燥感が反映されていた¹⁵。特に、「内向の世代」を故郷喪失者すなわち「ハイマートロス世代」¹⁶として擁護する動きが、「内向の世代」の命名及び糺弾を触発したであろう。「ハイマートロス世代」としての擁護は、「私」の主体性の喪失からの出発という「内向の世代」の文学的営為を積極的に評価しようとするものである。このような論調は、「不確かな私」をいぶかる声¹⁷や、「現実を不可抗力とみる」「無力感」が発せられる根拠を「内向の世代」における戦中・戦後体験に探し求める論¹⁸に継承されている。世代論的なアプローチから

10

「内向の世代」命名をめぐる議論は、古屋健三『「内向の世代」論』、慶應義塾大学出版会、1998、7-35頁参照。

11

小田切秀雄「戦時下の作家たち(下)」、『東京新聞』1971・3・24。ただし「新人の作家・批評家たち」(「戦時下の作家たち(上)」、『東京新聞』1971・3・23)と言っているように、小田切秀雄による糺弾の矛先は、「内向の世代」たる作家たちを積極的に擁護しようとする批評家たちにも向けられていた。「内向の世代」に象徴される1970年前後の文壇全体を批判していたと見てよいだろう。

12

小田実「鎖国の文学」、『群像』1975・6、214頁。

13

高橋英夫「われらの文学と「内向」の文学」、『中央公論』、1975・8、123頁。

14

高橋英夫「われらの文学と「内向」の文学」、前掲『中央公論』、119頁。

15

たとえば、饗庭孝男(「反歴史主義の文学」、前掲『文芸』)や川村二郎(「内部の季節の豊穡」、『文芸』1970・12)のような「新人批評家」への反論として「内向の世代」を命名した、とも考えられる。

16

饗庭孝男「ハイマートロスの文学(上)」、『東京新聞』1970・5・20。

17

上田三四二「「内向の世代」考」、『群像』、1973・4、243頁。

18

松原新一「「内向の世代」論の決算」、『解釈と鑑賞』1978・8、13頁。

19
饗庭孝男「ハイマートロスの文学(下)」、『東京新聞』1970・5・21。

20
竹中智子「黒井千次小論」、前掲『新潮』、43頁。

21
森安理文「新世代にとっての「家」」、『解釈と鑑賞』1978・8、38頁。

22
磯田光一「時間の変容」、(『新潮』1978・5)、高野斗志美「日常に潜む死角・固い空間性のくさび」(『解釈と鑑賞』1978・8)など。

23
黒井が自らの世代意識に関して積極的な発言も行っている点だけ記しておく。例えば、「敗戦を十代始めて迎えた僕らについて」(『ひとで』1954・5)など。

共通の時代体験を究明する形で「内向」の原因が論じられており、不安定で抽象的な作中人物の「内向」を招来した作家の「世代」的な体験が問題視されている。ここでも、黒井千次は一番手とされ、「今日におけるその世代の象徴的意味を占めている」¹⁹と位置付けられていた。

以上に言及した論のほとんどが、「内向の世代」を代表する作家として黒井千次をあげている事実をおさえた上で、1970年前後の黒井千次に関する論調を概観すれば、黒井の描いた企業における労働の意味を読み取ろうとするアプローチが主流をなしていた。1970年前後の黒井における問題意識は「現代の企業に熱中すべき仕事があるか」という命題として導出され²⁰、「現代の企業」を描き続ける作者にとっての企業空間がいかなる批評性を有しているのか、という観点から論及されてきたと言える。企業で「自己と向かい合う」ことを切望する登場人物の心性²¹、「現実の純粋労働」への作者の願望の行方²²に関する指摘は、企業における労働をテーマにした作品を産出し続けた作者の意図に迫ることで、黒井における「内向」を検討しようとしたものであろう。

これらの、「内向の世代」黒井千次について論じた諸論は、作中に見出される「内向」を確認するところまでは成功していると思われる。けれども、実際の物語において「内向」のプロセスがいかなる路程をもって表象されているかに関する精読を提示しているとは言い難い。合わせて指摘できるのは、黒井における「内向」のみに注目していることである。上記で「世代」に関して述べたように、「内向の世代」と命名されたがゆえに、黒井の「内向」を論じる上で、それが「世代」というものといかに関係しているのかという問題を見逃すことはできない²³。ただし、「世代」に関する研究は今後の課題としつつ、本稿ではまず黒井千次における「内向」を詳細に分析することにする。

3 失敗する労働実験における監視＝観察行為

ここから、黒井千次の「内向」をあらわす「現実の純粋労働」願望のモチーフが形象化された「聖産業週間」を分析する。この小説は、「現実の純粋労働」願望の達成可否を、小説をもって実験した(饗庭孝男)ものと評されている。企業内の仕事に「熱中」しようとする労働実験を通じて、「単純豪快な労働のイメージ」をつかみ、それによって「私は何者であり、私は何によって生きるのか」を突き止めようとする田口運平を観察する「ぼく」の記録、と要約できる。田口は一週間の労働実験を「ノート」に記録し、「ノート」を発見した「ぼく」はそれを盗み読みする。「ぼく」によって田口の「変化」の様子が語られつつ、そのような語りにも、「ぼく」の盗み読みした田口の「ノート」記録がそのまま差し込まれる、というのが小説の構造である。

急に猛烈な仕事ぶりを発揮して社内全体の噂に上った田口運平を「監視」する仕事を課長から任された「ぼく」は、田口の帰宅後、膨大に積み上げられている

書類の中から一冊の「ノート」を発見する。そこに記されていたのは、「私は何者であり、私は何によって生きるのか、を自らに明らかにする為」に、労働への「熱中のみを唯一の方法とする実験」を開始するという宣言であった。「今日の私の仕事の中に」「単純豪快な労働のイメージ」を手探りするために、「手応え」が感じられていない企業内の労働そのものに「熱中」することで「私」を確かめるための実験、「私」を「単純豪快な労働のイメージ」につなげる手がかりをつかむための実験が開始されたのである。

田口は「現実の純粹労働」を願望し、ひたすら自らの労働の深淵に潜り込むための実験を開始するのだが、〈1 問題提起〉で言及したように、このような願望は最初から達成不可能なものであった点を想起する必要がある。サラリーマンである田口は、日常の大部分を占める活動、すなわち会社での労働に対する報酬(サラリー)によって日常生活が支えられるような生を営んでいると言えよう。言い換えれば、田口にとって現実の労働とは、日常を規定かつ支配する行為である。あるいは、田口の日常性そのものが現実の労働と直結するとも言ってもよい。このような田口において、現実の労働に「熱中」して、その結果「遠い潮騒の響きのように響いて来る」「単純豪快な労働のイメージ」をつかもうとする営為は、それを現実・日常の中からつかもうとするものの、つかもうとするものが何であるのか明確に言語化することができず、「遠い潮騒の響きの」イメージとしてしかあらわしようのない非現実的かつ非日常的な「イメージ」を追いかける、非常に抽象的な試みである。つまり、現実・日常の只中から最も非現実的・非日常的な何かを探し求めるということを意味しており、最初から達成不可能な目標を設定した実験だったのである。

それでは、このように失敗する労働実験を開始した契機は、田口の「ノート」にどのように記されているのか。

怒れ、追え、倒せ、組み敷け、と私は身体の中に熱い声をこもらせて我が子を見守った。砂に半面を覆われた我が子の顔には、しかし同時に曖昧で気弱な表情が見られた。怒り狂って追うものか、ただぐるぐると隣家の男児の後ろを駆けるものか、と。怒れ、怒れ、怒れ、と私は声の中に漲らせた(中略)その怒りに熱中することなく、自らの全能力を振り絞ってその怒りに賭けることなく、その怒りを曖昧に他のものにすり替えたことが許せないのだ。誤魔化したことが許せないのだ。／——しかし我が子に対する私の怒りは、そのままの熱さをもって、突如、私自身に対する怒りに転化していた。(89頁)

隣家の男児との「取組み」に負けた「我が子」に対してではなく、「負けた口惜しさ」から湧いてくる「怒り」を「他のものにすり替え」「誤魔化」し、周囲から「怪物」と囃し立てられることに順応した「我が子」に対して「怒り」を覚えている田口の心情が披瀝されている。このような「怒り」が「そのまま私に対する怒りに転化」し、そこで自らの「怒り」の根源を探し求め、労働への「熱中」という現在・日常の問題に逢着するわけである。

このような「怒り」の「転化」において、「我が子」に対する観察から、観察される「我が子」の「怒り」が察せられ、それをきっかけに「私」の「怒り」が自覚されている。無論、田口における「怒り」の根源には、「現在というものを充たす」ことを可能にする「熱中への〈飢え〉」がある。けれども、もし彼が「我が子」の「すり替え」「誤魔化し」ぶりを目撃しなかったなら、自らの「怒り」と向かい合う契機は訪れなかったであろう。「何時かは顕在化させねばならない怒り」と言っているように、「現実の純粋労働」願望に目覚める要因自体は、一週間の「熱中」実験に自らを投じる「自己」の内部にすでに存在していた。しかし、その存在に気づき、そこから「私は何者であり、私は何によって生きるのか」を探索すること、すなわち他者の「怒り」が「私」に「転化」するためには、「我が子」に対する観察が必要条件となる。

このことが重要なのは、本小説の構造と通じるからである。本小説の構造をまとめれば、「我が子」の「怒り」を観察し、それに触発されて「自己」の「怒り」を覚える田口運平、その田口による「ノート」を盗み読みし、それに触発されて田口の実験をめぐる思索を自分の問題として受け入れるかのように「ノート」の一面に書き込む語り手「ぼく」、となろう。本小説が「現実の純粋労働」願望が書かれた実験である点に関しては先述した。実験という体制が採択された点から本小説を考え直せば、「現実の純粋労働」願望の達成（「現実の純粋労働」をつかむことはできるか否か）とは実験における仮説、小説創作とはこの仮説を検証するための、作者による実際の実験としての観察行為（「現実の純粋労働」をつかむことができるか否かを確認するために考案された実験プロセスの観察）と見立てられよう。だとすれば、先述した本小説の構造は、「我が子」・田口運平・「ぼく」をめぐる観察対被観察によって成り立つ、作者の作り上げた作中世界内における「転化」プロセスを超え、そのような構造を持つ小説を実験として考案して執筆した作者、黒井までをも巻き込むことになろう。なぜなら、本小説が実験である以上、実験には観察行為が必ず随伴することになり、「聖産業週間」という小説実験を最初に観察するのは、他ならぬ作者の黒井であるからだ。作者の観察行為によって成り立つ〈実験〉という営みを自らの創作に当てはめた理由は、このような観察行為による「転化」プロセスを緻密に配置することで、帰納的な推論結果を導出するための実験を行うような作中構造から見出すことができよう。

千賀正之は、黒井の作品構造における観察対被観察構造には、その裏腹に観察者と被観察者の立場が交代される仕組みが用意されており、最初は作者の立場を代弁するものとして立ち現れる観察者が、究極的に被観察者に転じることには、自ら構築した物語を観察する作者ですら被観察者に転じる可能性がひらめいていると論じている²⁴。「聖産業週間」の結末は、田口の「ノート」に触発されて書き込みをしている「ぼく」を、「部屋の入口に立ってじっと」「みつめていた」田口の姿の描写で終わる。ここで、観察者「ぼく」対被観察者田口の立ち位置が交代されていることは言うを待たない。黒井の小説創作が実験としてとらえられている点に関してはすでに触れたが、「聖産業週間」の構築「実験」(饗庭孝男)の記録を、

24

千賀正之「『私』はどこに……」、『批評文学』1971・3、80-89頁参照。

小説をもって「ノート」化している黒井千次によって考案されたこのような小説構造は、千賀正之の指摘しているように、作者と作品を取り巻く監視＝観察の関係性が転覆される契機を提示していると言えよう。なぜなら、「聖産業週間」が実験であることは、実験者黒井千次対実験物「聖産業週間」をめぐる、観察対被観察構造にも通じているからである。端的に言えば、小説をもって実験している作者は、小説によって実験されてもいるのだ。

負けた「怒り」と向かい合わず「すり替え」「誤魔化した」「我が子」への「怒り」は、「常に瞬間を相対化し、時間を手段とすることによって生きて来た」田口自身への「怒り」を自覚させた。彼は「すり替え」ず「誤魔化」さず、「怒り」そのものの根底に触れようとする。そのためには「常に瞬間を相対化し、時間を手段とすることによって生きて来た」「私」の変革が要求される。そこで、過去や未来との相対的關係に左右されない「今こそ」を生きる「自己」をつかもうとし、「今のこの仕事」への「熱中によって凝結して行く自己を通して此処に今在ることの意味を確かめんとする行為」を試みる。これが一週間の労働実験、つまり「聖産業週間」である。

しかし、「私は何者であり、私は何によって生きるのか」を確かめることは、失敗した。なぜなら、「熱中」そのものを手に入れることができず、「熱中」への欲求は、拒絶されたからである。田口は「ノート」に、「我が子よ、父は、怒り狂い打ち倒す敵を失ってしまった」と付け加えている。彼にとって「怒り」は、その発端となる「敵」たるものに「拒絶」されず、「敵」たるものと向かい合うことのできる状態、「我が子」のことで言えば「取組み」のできる関係が成り立つことによって意味を持つからである。

だが、そもそも田口が「取組み」をしようとした労働が自らの仕事として想定されている限り、「私」に向かい合う「敵」たる「私」を対象としつつ、そのような対象に対して、主体でありながらなお対象とも同化されうる「私」を対置させることは、たとえば「私」が「私」を観察する、といったように、主語と目的語の関係が述語の性格に適しないような、論理的に成立不可能な事態に陥りかねない。このような事態は、最終的には狂気の他の何ものでもない²⁵。現実・日常の労働を通じて、「私」によって「私」を完璧に相対化することで、非現実的・非日常的な「私」を、現実的・日常的な「私」として成り立たせることは、それがあくまで現実・日常の中の営みとして行われる限り、不可能である。だから、実験は失敗せざるを得ないのだ。

4 失敗する労働実験から「自己の空位」としての「内向」に

ここまで、「聖産業週間」と名付けられた小説実験が、監視＝観察による「転化」の連鎖によって支えられている点から、作品の構造を分析した。「私は何者であり、私は何によって生きるのか」という問いにおける「私」という「自己」は、そのような自己確認においてのアプリオリな主体ではない。他者の存在及び観察が

25

黒井の描く「私」における狂気のような性質を指摘したものに、磯田光一ほか「(共同討議)〈内向の世代〉以後」(『国文学』1980・4)の中の磯田の発言(135項)、黒井千次・野呂重雄「(対談)文学創造における〈労働〉の意味」(『新日本文学』1970・3)の中の野呂の発言(61-62項)など参照。

「転化」することによってとらえられるアポステリオリな「自己」として定位されよう。千賀正之は、黒井千次の小説における「私」の定位に関して以下のように分析している。

語るべき自己は最初からそれなりに相対的な存在としてしか確認され得ず、その自己をそれが取り巻く現実との相関関係によって更に相対化されていく過程でしか把握できない黒井にとっては、安んじて語れる私などあろうはずがなかった。黒井にとっての私は、同時に彼であり、同時に我々であり、彼等であり、彼等の中の私であり、我々の中の彼であるという、いわば一般的な私というか、抽象的な、相対的な存在としての私というものでしかなかったのだ。(中略)私が黒井の文学にあらわれる〈変化〉と呼び迎ってきたものが、実は分子としての変化であり、分母としては「安んじて語るべき私の不在」ともいうべきところで一貫性をもっていることが明らかになる²⁶。(下線引用者)

26

千賀正之「『私』はどこに……」、前掲『批評文学』、99頁。

黒井千次文学の特徴に、「私」をめぐる「永久運動」(高橋英夫)が繰り広げられる中で「安んじて語るべき私の不在」が指摘されている。「聖産業週間」に限って言えば、田口運平・「ぼく」をめぐる観察対被観察の立場が「転化」する可能性を内包する「永久運動」の中で、田口の「私」たるもの・「ぼく」の「私」たるものは絶え間無く相対化にさらされ、その結果、各々の主体性を支える「私」たるものは、不確かかつ不安定なものになってしまう。

黒井は、このような「案じて語るべき私の不在」をめぐる、「自己の空位」として説明している。

戦後派の作品の出発点には強固な「自己」が存在している。輪郭の明確な一人の「人間」が存在している。先天的に存在する「自己」を前提としてその文学の世界は開けてくる。／その前提そのものを、しかし今僕は疑わなければならないのではないか。「自己」そのものが現在どのようにして存在可能であるかが、まず問われねばならぬ問いではないか。／つまり、戦後派文学によってはじめて呼びおこされた僕の「自己」意識は、企業のメカニズムの中に組みこまれることによって逆に自分の中に「自己の空位」を見出したといえる²⁷。

(下線引用者)

27

黒井「可能性と現実性」(初出1963・9)、『仮構と日常』、河出書房新社、1971、53頁。

黒井は、1970年前後の現代社会の中で「自己探索」に出発すると表明し、そのための実験として小説創作に取り組んだ。「自己」と、「自己」の「外側」にあたる現代社会が交差する地点を、「熱中」の対象としての労働に据え、「現代社会の凝縮体」²⁸「企業」のメカニズムの中の労働を小説化することによって、「自己探索」実験を施行した。「聖産業週間」では、「企業」のメカニズムの中に組みこまれることを設定し、「現実の純粋労働」をつかむことができるか否かを確かめるために小説実験を開始した。実験を観察した結果、「企業」のメカニズムの中での「現実の純粋労働」願望は達成されず、「自己の空位を見出した」のであろう。「聖産業週間」を創作する実験によって黒井は、「現実の純粋労働」願望が挫折した代わりに、

28

黒井「自己実現へのノート」(初出1970・11)、前掲『仮構と日常』、31頁。

「自己の空位」としての「自己」と向かい合うことができたと考えられる。

「現実の純粋労働」願望から生まれた小説実験は、「自己」の発見にたどり着いた。しかし、「聖産業週間」の分析から明らかなように、「自己」は、「我が子」の「怒り」が田口運平に、田口が「ぼく」に、「ぼく」が作者に、というような「転化」の連鎖によってしか見出すことができない。しかも、発見された「自己」そのものですら不確かかつ不安定な「空位」なるものである。「充たす」営みの主体である「自己」が「空位」である限り、「現在というものを充たす」ことが完遂されることもなく、もしも完遂されたとしてもそれと向かい合える「自己」、「空位」が満たされた「自己」を手に入れたと認識することは、決してできないだろう。繰り返すが、労働実験は成功しなかったのだ。「現在というものを充たす」ためには、「自己の空位」を埋めること²⁹以前に、「現在」における「自己」を「自己の空位」として見出す営みが先行されねばならない。

このことからすれば、「聖産業週間」に書かれている仕事と労働は、あくまでも〈現代の〉という限定されたものになる。〈現代の〉仕事と労働の中から黒井が探し求めるものは、非現実的かつ非日常的である限り、〈現代の〉ものと無縁である。佐高信は、現代における仕事と労働における「不自由を、ディテールに活写して浮かび上がらせる」ジャンルとして「経済小説」を規定し、「聖産業週間」をこれに分類している³⁰。「経済小説」ジャンルの規定に関する論議は本道から逸れるので割愛するが、現代労働における「不自由」、すなわち労働する人間の疎外を「活写」するところに着目して「経済」という用語を適用する思考は、労働者の疎外を問題視したマルクス主義の理論や思想を連想させなくもない。断っておくが、マルクス主義そのものの有効性に対しては全く異論がない。ただし、先述したように、「聖産業週間」を考察する際に、安易にマルクス主義の理論や思想に頼った眼差しによる意味づけは、この小説が執筆・発表された1970年前後という時代性を捨象してしまう恐れがあると思われる。

要するに、「聖産業週間」と名づけられた失敗する小説実験を通じて、黒井は「自己の空位」としてしか言いようがない「自己」に、ようやく向かい合うことができた。「現実の純粋労働」を手探りするが失敗する田口に対する作中描写を、マルクス主義の理論や思想から一步離れて、表象そのものと作者の思惑を考慮しつつ読み直せば、少なくとも黒井の夢見た労働は、書かれていない。この点を見逃してならないのは、本小説がまさに実験、しかも失敗した実験であるからだ。そして、この失敗が重要なのは、失敗する労働実験を通じて、「現在」における「自己」を「自己の空位」として作者黒井が見出したからである。本小説が、「内向」の内実を露呈する地点はここである。「自己の空位」と向かい合うことは、黒井における「内向」の内実を語るものであろう。

29

原善「〈内向の世代〉の内部と外部」、『解釈と鑑賞』2006・6、34頁。

30

佐高信「他人本位の屈折を描く」、日本ペンクラブ編『経済小説名作選』、筑摩書房、2014、503-506頁。

5 身体感覚によって触れ合う「自己の空位」

以上、「聖産業週間」という小説が、失敗する小説実験である点に着眼し、作品の構造を支えている観察対被観察の「転化」を分析し、それと黒井の創作意図とを照らし合わせて考察した。さらに、「内向の世代」を代表する作家としての位置付けが付与されている点から考えれば、「聖産業週間」における「内向」の内実は、不確かかつ不安定な「私」たるものすなわち「自己の空位」との向かい合いを意味するということを確認した。堂々巡りするよう見えなくもない「私」をめぐる永久運動」をここまで細く分析した理由は、第一に、「内向の世代」黒井千次における「内向」を明示することで、今まであまり論じられることのなかった「世代」と「内向」との関係を的確に見定めるための基礎作業を行うため、第二に、極めて抽象性の高いように読まれる「内向」のプロセスにおいて、具体的かつ実在的な部分があることを指摘するためである。第一の点に関しては今後の課題として後で触れることにし、以下では第二の点、つまり「内向」が言葉通りの抽象的な「内向」に限らない様相を、身体感覚をめぐる描写を軸に紐解いていきたい。

課長から「田口君を保護、監視する仕事」を命じられた「ぼく」であるが、作中に描写されている「監視」の様相は、仕事の内容や進捗に関する充実した「監視」を行うようには描かれていない。「レポート用紙をひきはがす鋭い音」「計算機のスイッチをいれる小さな音」「乾いた機械音」「リレー式計算機のピンクの数字の素早い点滅」という「田口」の仕事ぶりに対する描写は、「監視する仕事」を十全に遂行しようとする観察とは程遠いものである。課長が、「音」や「点滅」のような、聞こえたり見えたりする事項、つまり身体感覚によって認識されるような事項に関する観察を期待したとはどうしても考えられない。異常な仕事ぶりの原因は何であり、部下を総動員した作業はいかに行われており、最終的にいかなる結果を生み出すか、などに関する「監視」の報告を期待したに違いない。本小説が作者によって考案された実験であることを再び想起すれば、このような描写は、作者の意図によって書き込まれたことになる。従って、観察行為によって実験が支えられる以上、「田口」に対する「監視」=観察の様相として「音」「点滅」のように、他ならぬ身体によって感じられるような性質のものが作中に書かれていることは、注目に値する。

田口運平の机の上だけに、しまい残された膨大な書類が、ずっしりと重く、斜めに崩れたまま積みあげられている。それは、疲労のにじんだ、厚みのある田口運平の肉体そのものの重さをぼくに感じさせた。ぼくは崩れかけたその書類に手を触れ、机の上に美しく積みなおしたい衝動を感じた。ぼくは書類を上から掌の幅程の厚さにとりのけた。／——そこに一冊のノートが埋められていた。(88頁、下線引用者)

「ぼく」は、田口運平が「熱中への〈飢え〉」に起因する「怒り」によって開始した労働実験の成果である「膨大な書類」に「手を触れ」たい「衝動を感じ」、「書類を上

から掌の幅程の厚さにとりのけ、「ノート」を発見する。「手を触れ」たい衝動を感じさせる「書類」は、「田口運平の肉体そのものの重さ」を連想させるものとして描かれている。「ノート」から「田口運平の肉体そのものを感じずにはいられなかった」(91頁)のだ。

「ぼく」に関する描写を見れば、「膨大な書類」に基づいて行われた田口の「作業結果の報告」を傍聴しながら、「手で触れる」市場の構造や「肉眼で見える」需要の動きを連想するように書かれている。「ノート」を読み終わった「ぼく」は、「ノート」に書き込まれている田口の「息の匂うような太い字に抱きこまれるようにして、いや、それに突きささるようにして」何か書かずにはいられなかった。

ここで、田口の「息の匂うような太い字」に「突きささるように」書き込む「ぼく」の行為は、「書類」に「手を触れ」たい衝動に通じていると考えられよう。田口の労働実験が、「田口運平の肉体そのもの」を連想させる「書類」「ノート」を通じて、「ぼく」の身体によって感じられているのである。特に、田口の実験が記録されている「ノート」に関して、「ぼく」は以下のように語っている。

田口運平のノートはぼくの中で青黒く肥大していた。鈍いうずきをとまなう地腫れした腫れ物のように、それは明らかに自分の身体の一部でありながら、独立した意志をもつ一個の異物であるかのようにぼくの中でふくらんでいた。長い作業記録の前文ともいえる彼の〈賭け〉のモチーフをもう一度読み返した時から、ぼくはどうやら彼の実験の内部にのめりこんでしまったかのようだった。(92-93頁)

田口の「ノートに手を触れ」るのが、「ぼく」にとっては田口の「肉体」に「触れ」ることになる点に関してはすでに確認したが、上記の引用で、「触れ」ることによって田口の「肉体」が「自分の身体の一部でありながら」「異物」にもなる様相が描かれている。田口・「ぼく」における観察対被観察という構図が相対化され、それが「自己の空位」としての「内向」につながるとした前節までの分析と合わせて考えれば、引用文は、「ぼく」の「身体」=肉体対田口の「肉体」=身体という、自他関係を形成しているはずの両者における境界が崩壊した瞬間をとらえていると言えよう。「ぼく」が「実験の内部にのめりこんでしまった」とする認識も、実験が記録されている「ノート」=田口の「肉体」=身体と「ぼく」の肉体=「身体」との境界が崩壊する局面を、「ノート」を媒介にして、抽象的ではあるものの形象化したものに他ならない。

「書類」「ノート」に「触れ」ることを契機に、「ぼく」が田口の労働実験を感知することに着目し、このような様相を「触れ」という体験による触れ合いの契機と関連させながら解釈すればどうだろうか。哲学者の坂部恵は、身体的接触による触れ合いの契機と関連して、「自-他の区別、内-外、能動-受動の区別を含め、これまでの差異化分別の体系の構造安定的な布置をあらためて無に化し、根底から揺り動かす相互嵌入の契機を本質的に伴っている」³¹と述べている。皮膚の存在が「私と環境、私と他者、私と世界を区別する役割」³²を担っているのであれば、

31 坂部恵「「ふれる」ことについてのノート」(初出1982・7)、『「ふれる」ことの哲学』、岩波書店、1983、37頁。

32 傳田光洋『皮膚感覚と人間のこころ』、新潮社、2013、143頁。

上記の引用文における、皮膚上のものでありながら「異物」のように感じられる「腫れ物」は、「私」対非「私」の境界を打ち壊す契機としての触れ合い、その触れ合いの契機としての「触れ」る体験に対する比喻として機能するのではなからうか。「私」でありながら「私」ではない「腫れ物」(=「ノート」=田口の「肉体」)は、そもそも「私」であるはずのない他者の身体の象徴であるからだ。

33

小久保実「内部の豊饒」、『解釈と鑑賞』1977・9、132-133頁。

34

前田愛「空間の文学へ」(初出1979・9-11、1980・1)、『都市空間の中の文学』、筑摩書房、595頁。

小久保実は、黒井千次文学における「感覚の饗宴」を指摘し、それが「内向の世代」の文学的特徴でもあると論じている³³。前田愛は、黒井によって構築された作中の空間の「輪郭線を保証しているのは、筋肉感覚のリズムであり、そのたしかかな手ごたえである」³⁴と論じている。両論に共通しているのは、黒井千次文学における身体感覚を伴う表象に対する着眼であろう。ただし、黒井千次における身体感覚の表象に関しては、観察という行為に象徴される視覚感覚がしばしば言及されるのみであった。

しかし、本稿では、「内向の世代」としての黒井千次「聖産業週間」を考える場合、触覚を媒介とする身体感覚と、それによる触れ合いの局面が、小説の構造に深く関連している点を強調したい。触れ合いを機にして、自他の境界が崩壊し、観察対被観察関係に象徴される自他関係は崩壊に導かれ、田口・「ぼく」両者における「私」たるものの立ち位置(=主体性)は不確かかつ不安定なものになる。不確かかつ不安定な「私」の立ち位置は、「内向」の内実をなす「自己の空位」である。

本小説で「自己の空位」としてあらわれている観念的な「自己」は、同時に「触れたい」対象、身体感覚を通じて直接的に感知されたい対象としても願望されていると言えよう。ただし、身体感覚を通じて「現実の純粹労働」願望をつかもうとする田口が追いかけるものとして提示されている「潮騒の響き」のイメージが、なぜ労働の「過程」と「収穫」を結びつける「円環の鳴り響く歓びの音」につながるのかについて、作中から演繹的に説明するのは難しいと思われる³⁵。小説に書かれているのは、「自己探索」に向けて繰り広げられる「転化」の連鎖において、身体を通じて感知はされるが、明確に言語化されることはない、抽象的なイメージの連鎖のみである。けれども、抽象的なイメージの連鎖を通じてではあるが、田口の労働実験の成果は、「ノート」=田口の「肉体」を媒介に、身体感覚を経由して確実に感じられている。

だからこそ、「ぼく」はそれに応じるかのように、「ノート」に「突きささるように」書き込んだのではなからうか。ここでの「突きささる」という描写は、あたかも田口の「肉体」そのものに触れたようなイメージを喚起させよう。ここで、3節で「我が子」の「取組み」に負ける情景を目撃することをきっかけに労働実験の構想が芽生え、実験の結果として「ノート」が作成されたという物語の流れを想起したい。「取組み」は、子ども同士の身体的な接触によって成立する遊びである。「ノート」に書き込む行為をあえて「突きささる」と、身体的なイメージを喚起させる生々しい比喻をもって描いたのは、「ノート」=田口の「肉体」と「ぼく」との「取組み」の契機、すなわち身体的な接触を伴う触れ合いの契機を、抽象的にイメージ化させることになる。もし、田口の身体をそのまま接触される「肉体」

として描くならば、田口による労働ではなく、田口という労働者に作者の意図が投影されたと読まれる恐れがある。「ノート」=田口の「肉体」の比喩を用いるのは、本小説が労働者ではなく、労働を題材としているからなのだ。

「聖産業週間」で、他者に対する観察によって立ち上がる「自己の空位」としての「内向」が、身体感覚に依存するプロセスと相まって書かれていることを見逃してはならない。黒井本人も「肉体に素朴に向かい合うようにして始められた自己への探索は、生を繰り返りひろげていくための出発点の確認であった」³⁶と述べているように、「自己」の内部で繰り返られるイメージの連鎖が、「肉体」に向かい合うプロセスとしても成り立っており、これは「自己」を見出そうとするプロセスとしての「内向」に通じていると考えられる。哲学者の松永澄夫は、人同士が肉体に触れることで、「〈私〉が呼びかけられ、〈私〉が己をつかみとって立ち現れるように促される」とし、このような接触は人同士における「理屈以前の根本的な人間関係」「分かり合い」の基礎になると述べている³⁷。「聖産業週間」における「内向」が「自己の空位」と向かい合うことの発見によって導かれる位相に関してはすでに確認した。仮にそれが〈内〉へ〈向〉かうことと言えるなら、そのイメージが身体感覚を媒介として他者との触れ合いの触媒にもなるという点で、〈内〉から〈向〉かうものにもなるだろう。

要するに、「聖産業週間」における「内向」は、「自己」の「内」に閉じこもる一方通行的なものでは決してない。「ぼく」と田口との間の、「ノート」を媒介として展開される触れ合いの契機は、他者との触れ合いを内包する「内向」の内実をあらわしている。言葉をもって記録される以前の身体感覚を形象化しようとした黒井千次の「内向」における抽象性は、身体という最も根源的かつ原初的な物質性に依存している点で、具体性及び実在性をも持ち合わせている³⁸。しかも、「ノート」を田口の「肉体」に見立てることで身体性を構築し、そこから接触による身体的な触れ合いの契機を形象化することで、抽象的な事象を用いながら具体的かつ実在的な身体レベルの物語を紡ぎ出す「聖産業週間」は、まさに実験という名称にふさわしい小説と言えよう。

6 おわりに代えて——「内向」から「世代」へ

ここまで、黒井千次における「内向」の問題について「聖産業週間」を中心に考察した。「企業」での「現実の純粋労働」願望として導出される黒井の「内向」は「自己の空位」の発見にたどり着くが、小説実験において展開されているのは、「自己の空位」と向かい合う営みである。そのプロセスは、身体感覚を媒介として繰り返られており、「自己」に閉じこもることにとどまらない。以上で明らかにしたように、身体感覚を通じて他者と触れ合う可能性を含有しているのだ。大久保典夫の言葉を借りれば、「〈内を通じて外へ〉」という志向を有すると言える³⁹。これが、「聖産業週間」から確認される、「内向の世代」黒井千次の「内向」の核心である。

36

黒井「自己実現へのノート」、前掲『仮構と日常』、31頁。

37

松永澄夫「自分が書き込まれた地図を描く」、松永澄夫編『私というものの成立』、勁草書房、1994、30-32頁参照。

38

柄谷行人は、「内向の世代」において「内面への道」が「外界への道」に通じることを指摘している。柄谷行人「内面への道と外界への道(上)」、『東京新聞』1971・4・9。

39

大久保典夫「時代背景と文学の様相」、『解釈と鑑賞』1977・9、13頁。

さて、ここまで「聖産業週間」を、「内向の世代」小説として読み直す作業を行ったが、「内向」のみを分析しただけでは、「内向の世代」をまともに論じたとは言えないだろう。先述したように、「内向の世代」には「世代」という項も存在しているからである。「内向」と「世代」という項がまったく無関係であるようでありながら、実のところ様々な局面において錯綜していることに関しては、さらなる考察が要求される。この点と関連し、黒井千次に限って言えば、以下のような記述は注目に値する。

現代における個の存在の条件は、社会的な状況を出発点として求められるが、又現に存在している一人一人の人間の具体的な歴史に即して検討されねばならぬという重層性をもっているわけである。「僕の歴史」という奇妙な考えを持ち出したのは、そのためである。／この発想の底には、具体的な僕の歴史の中に、未熟児として遂に育たなかった自己意識の早産の痕跡が横たわっているのではないかという恐れがひそんでいる。世代論に固執するわけではないが、「僕の歴史」を縦に掘り下げようとする時に第一にぶつかるものは戦争である⁴⁰。

「現代における個の存在の条件」の模索は小説実験になろうが、「社会的な状況」すなわち「現代」を象徴する企業内の労働という側面から「自己探索」を試みる営みと、「歴史」の大変動と関わりを有しながらあくまで「僕の歴史」の領域と限定されている「戦争」から「自己探索」を試みる営みとが併存しているという「重層性」を述べている。例えば、戦時期の子ども世代の体験である学童集団疎開を題材と採用しつつ、「現代」における「世代」体験としての疎開体験の意味を、過去の疎開体験と「現代」の労働と対置させることで相対化する小説に、「聖産業週間」の約1年後に上梓された「時の鎖」（『新潮』1969・11）がある。本稿の考察結果を踏まえた上で、「時の鎖」において「内向」と「世代」がいかに絡み合っているのかについての、さらなる研究が要求されようが、今後の課題として記しておく。

最後に、黒井千次に代表される「内向の世代」研究における今後の課題について触れながら本稿を閉じたい。黒井の描く「私」は、「自己」が「空位」であるがゆえに「内向」運動を続けざるを得ない観察者である。しかも同時に、被観察者に転じる「運動」を反復する。このような「永久運動」の力学の磁力が、「悔恨共同体」特有の〈時間〉意識の「無化」「相対化」に向けられているのであれば、黒井千次を含め「内向の世代」における「内向」と「世代」の錯綜関係に対する立体的で体系的な研究は、文学の場における思潮の確認を超え、「悔恨共同体」のゆらぎが生じる1970年前後をめぐる思想的変動の解明にまで連携されると思われる⁴¹。学童集団疎開体験を戦争体験とする「少国民世代」は、「悔恨共同体」の最年少の層を形成している。しかし、同じく学童集団疎開体験を有しつつもそれをテーマに小説を上梓したはずの黒井が、「悔恨共同体」に対する「無化」「相対化」として働きうるという事態は、いかに解釈すればよいのか。現段階で言えるのは、「内向の世代」文学を、彼らの登場した1970年前後の社会的・思想的コンテクストを

40

黒井「可能性と現実性」、前掲『仮構と日常』、56-57頁。

41

戦後の時空間における「悔恨共同体」意識の歴史の変容に関しては、成田龍一「戦後」はいかに語られるか」、河出書房新社、2016、53-84頁参照。

踏まえた上で読み直す作業が要求されるということである。

本稿は、このような問題意識に基づいた研究の第一歩に過ぎない。前田愛による「悔恨共同体」特有の「時間」意識の「無化」「相対化」の指摘は、残念ながら完成されずに終わってしまった。以上に述べた今後の課題との関連で言えば、1970年前後に少国民「世代」の戦争体験として活発に論じられた学童集団疎開体験を小説化した「時の鎖」の分析を通じて、本稿で明らかにした「内向」が、「世代」といかに交差し、その交差を意識的に形象化しようとした黒井の文学が、「悔恨共同体」特有の〈時間〉意識の「無化」「相対化」といかにつながるのかに対してさらなる考察を行うことが必要であろう。これについては、今後の課題としたい。

附記

「聖産業週間」の引用は初出による。引用に際して旧字は新字に改め、ルビ・傍点は適宜省略した。引用文の「／」は改行を示す。参考文献の副題は省略した。